

「賢く学ぶ力」を高めるための保健体育の授業づくり —「汎用性のある知識」に着目して—

大野 高志 高度教職開発コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：賢く学ぶ力，汎用性のある知識，運動領域，系統性

1. 問題の所在と研究の目的

本研究を構想するに当たって、筆者が着目したのが、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編¹⁾の体育分野、各運動領域（体育理論を除く）に見られる「指導に際しては、（中略）汎用性のある知識を精選した上で、知識を基盤とした学習の充実を図ることが大切である。」という記述である。そして、筆者はこの「汎用性のある知識」を学習の基盤とすることによって、生徒が、新しい知識及び技能を、すでにもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得できると考えた。このような生徒の姿を、奈須（2017）²⁾は、「その領域に固有な知識をほとんど持たない、その意味で初心者でありながら、手際よく新しい領域の学習を進め、優れた問題解決行動を示す人」や「知的な初心者」と表現し、「知的な初心者」の育成が学校の役割であると記している。また、保健体育科においては、岩田（2019）³⁾が、「より『賢い学び手』を育てていくこと」という表現を用いて、授業改善への期待を記している。

そこで、「汎用性のある知識」をキーワードとして自身の授業実践を省みると、運動領域によっては、「汎用性のある知識」を意識すらしていない現状があることに気付いた。そして、その傾向が特に顕著なのが、器械運動領域である。例えば、マット運動の前転を指導する時、「手を遠くに着く」「臍を見るように体を丸める」「腰を高く上げる」などの技術的なポイントは指導するものの、別の技とのつながりを意識させる指導は、できていないことが多い。同様の課題を、岩田（2019）³⁾は『『個別的で特殊』なそれぞれの運動種目や技の『絶縁的』な学習』と表現し、この現状からの脱皮が求められていると記している。

このような背景と筆者の問題意識から、本研究では、「汎用性のある知識」に着目した。そこでは、「汎用性のある知識」を手掛かりに、生徒が技と技、運動と運動とを結び付けながら問題解決をする力、いわゆる「賢く学ぶ力」を高めていくことを企図する。

2. 研究方法

A中学校において、2020年11月から12月に行った器械運動領域マット運動の授業実践の学習カードや授業映像から、「汎用性のある知識」を生徒がどのように習得し、課題解決に向かったのかを考察する。また、2021年10月に行った球技領域ネット型と、11月に行った体育理論の授業実践の学習カードや生徒の発言から、生徒が運動領域の共通性や独自性をどのように捉えているのかを考察する。

3. 実践の概要と考察

3.1 器械運動領域マット運動「つながる？つなげる！回転系」2年生 2020年11月

(1) 授業づくりのねらい

表1 マット運動の系統表

(中学校学習指導要領解説保健体育編より引用)

系	技群	グループ	基本的な技	発展技
回転系	接転	前転	前転 開脚前転 補助倒立前転	伸膝前転 倒立前転 跳び前転
		後転	後転、開脚後転	伸膝後転、後転倒立
	ほん転	はねおき	頭はねおき	
		倒立回転 倒立回転跳び	側方倒立回転 倒立ブリッジ	ロンダート 前方倒立回転(跳び)
巧技系	平均立ち	片足平均立ち	片足平均立ち	片足正面水平立ち Y字バランス
		倒立	頭倒立 補助倒立	倒立

マット運動は、回転やひねりなどの動きを使って意のままに体を操るために、独自の身体的・感覚的な能力が必要とされる運動である。そのため、これまでの筆者の授業では、技を提示し、できてしまえば、すぐ次の技へと移行していく展開が多く、技と技との共通性とは何かという知識を、生徒と共有することはなかった。一方でマット運動は、技がもつ運動構造の共通性に基づいて系統的に分類されている運動でもある(表1)。つまり、この分類の背景にある運動構造の共通性を、生徒自身が「汎用性のある知識」として理解することが、本実践のねらいとなる。

そこで、本単元では、基本的な二つの技の追究を通して、生徒が見いだした「汎用性のある知識」を手掛かりに、新たな技の習得を目指す展開を位置付けた。具体的には、接転技群の基本的な技である前転と、ほん転技群の基本的な技である側方倒立回転を追究する中で、生徒が見いだした回転系の「汎用性のある知識」を手掛かりに、新たな回転系の技である開脚前転の課題を捉え、技の出来映えを高めていく展開を仕組んだ。

そこで、本単元では、基本的な二つの技の追究を通して、生徒が見いだした「汎用性のある知識」を手掛かりに、新たな技の習得を目指す展開を位置付けた。具体的には、接転技群の基本的な技である前転と、ほん転技群の基本的な技である側方倒立回転を追究する中で、生徒が見いだした回転系の「汎用性のある知識」を手掛かりに、新たな回転系の技である開脚前転の課題を捉え、技の出来映えを高めていく展開を仕組んだ。

(2) 生徒の学びの実際

第1時、本単元で学習する三つの技の試行へと向かった生徒の多くは、前転は何とか回れたものの、開脚前転では立ち上がることができなかった(成功者は41人中5名)。ここでA生は、「前転は、腰の高さによる位置エネルギーを得ることが大切。開脚前転は難しすぎて、起き上がれる気配が皆無だった。」と振り返った。示範映像と自分の演技とを比較し、腰の高さの違いに気付いたA生の考えや、他の生徒の気づきを捉え、筆者は気付いたことを付箋紙に書き出し、全体で共有することを提案した。

第2時、生徒は前転と側方倒立回転という二つの技に対して、計62枚の付箋紙を記入した。筆者は振り返り場面で、前転には「着手を遠く」、側方倒立回転には「着手を近く」という真逆の気づきが存在することを紹介した。そして、それぞれの目的を生徒に問い掛けた。第3時の追究の中で生徒は、前転で遠くに着手するのは「回転の勢い」を生み出すため、側方倒立回転で近くに着手するのは「運動伝導」をさせるためであると考えた。そして、それら二つの視点は両方の技に共通していることや、付箋紙に記入した気づきの多くが二つの視点につながっていることから、生徒は「回転の勢い」と「運動伝導」を回転系の「共通するポイント(本単元における「汎用性のある知識」の呼称)」として理解した。

筆者は、「回転の勢い」をいかにして生み出し、どのように「運動伝導」させているのかという生徒の考えを引き出しながら指導した。これにより、二つの技の成功者が増え(前転40人→41人、側方倒立回転16人→39人)、A生の動きにも変化が見られた(図1)。

単元後半，筆者は，再度開脚前転に取り組む場を設けた。第1時に「皆無」という言葉を用いていたA生は，『回転の勢



図1 前転（上段），側方倒立回転（下段）におけるA生の変容

い』を意識するとお尻は浮いた。『運動伝導』が今後の鍵になる。」と振り返った。これは、「共通するポイント」を視点を，新たな技への見通しをもった姿である。単元末の開脚前転の成功者は36名であり，前述のA生も図2のような変容を見せた。

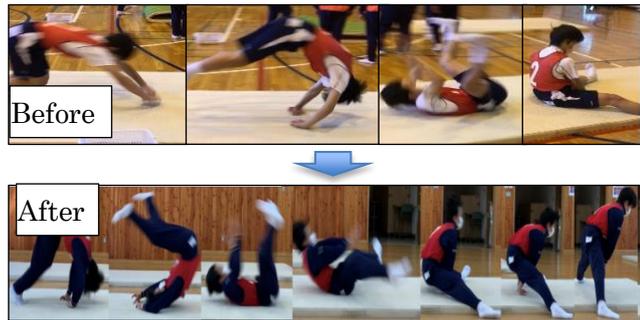


図2 開脚前転におけるA生の変容

(3) 考察

本実践において，生徒は「汎用性のある知識」を手掛かりに，技と技とを結び付けて問題解決に取り組んだ。さらに，単元末のA生の振り返り（図3）からは，マット運動を，前単元で学習した器械運動領域の跳び箱運動と結び付けていることが分かる。

このような姿から，「汎用性のある知識」を基盤とした学習を展開していくことで，生徒が技と技，運動と運動とを結び付けながら問題解決を進めていくことができる可能性が見えてきた。

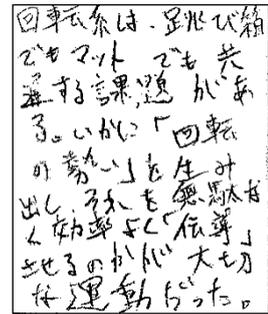


図3 A生の振り返り

3.2 球技ネット型「ダブルセット・バレーボール」3年生 2021年11月

(1) 授業づくりのねらい

球技領域は，その「戦術的課題」の特徴から三つの型に分類され，それが学習指導要領にも反映されている。つまり，その「戦術的課題」に関わる知識が「汎用性のある知識」の中核を成すと考えられる。筆者は，球技領域においては，対象学級の生徒に対して1年次から「戦術的課題」を基盤にした学習を展開してきた。本単元では，新たなネット型の球技に出合った生徒の姿から，「戦術的課題」に関わる知識の汎用性を明らかにする。

(2) 生徒の学びの実際

ネット型の第1時，筆者からこれまでの学習との関連を問われた生徒は，球技領域の階層から「役割や行動の選択的な判断が重要であること」や「作戦の必要性」を挙げた。また，ネット型の階層からは「空間（相手が返球できない場所）をねらう」という「戦術的課題」を挙げた。各時間における生徒の振り返りにも，「戦術的課題」に関する記述が多数見られたが，球技領域におけるこれまでの学習に関する記述は見られなかった。

(3) 考察

生徒が、領域や型など、学習内容を階層的に捉えている実態に触れられたことが、本実践の成果と考える。一方で、既習の球技とのつながりに関する記述が見られなかったことから、これまでの学習を理論的に振り返る機会を設ける必要性が見えてきた。

3.3 体育理論「運動やスポーツの学び方」3年生 2021年 11月

(1) 授業づくりのねらい

3年次の領域選択の授業を前に、「運動やスポーツの学び方」を振り返る体育理論を位置付けた。そこでは、生徒がその領域の特徴をどのように捉え、領域の「共通性」や「独自性」をどのように認識しているのかを明らかにすることを主なねらいとした。

(2) 生徒の学びの実際

表2 事前アンケートにおける各設問に対する回答の概要（授業資料）※回答者数38名

設問	器械運動	(%)	ダンス	(%)	球技	(%)
①領域に共通する 楽しさ	達成	(84.2)	リズムに乗る	(47.4)	協同, 協力	(89.5)
	挑戦	(55.3)	自由に動く	(28.9)	達成	(65.8)
	成長	(28.9)	自己表現	(23.4)	競争	(57.9)
②領域に共通する 学習のポイント	客観的事実と主観的な 感覚の往還	(57.9)	アイデアの交流	(89.5)	考え, 作戦, 思いの 共有	(94.7)
	友との比較	(57.9)	模倣	(44.7)	練習の工夫	(36.8)
	コツの交流	(36.8)	情緒の開放	(36.8)	他者の観察, 分析	(36.8)

表2から、器械運動と球技に共通する楽しさとして「達成」することの楽しさが高い割合を占めているが、その楽しさを味わうための学習のポイントは異なっていることが分かる。筆者は、このことについての議論を学習の中心に据えた。生徒は「問題解決の仕方や、そのための自他の生かし方が、運動領域を特徴付ける。」「運動の内容と同じくらい、その特徴に応じた学び方に関する知識も大切である。」という意見を出した。

(3) 考察

本実践における生徒の姿から、内容面に加え方法面からも「汎用性のある知識」を捉えていくことの必要性が明らかになった。

4. 結論及び今後の課題

本研究では、「汎用性のある知識」を基盤とした学習が、生徒の技や運動を結び付けながら問題解決をする力、「賢く学ぶ力」を高めることに有効であることが見えてきた。

一方で、生徒は運動内容だけでなく、問題解決の方法からも運動の特徴を見だし、つながりを感じていることが分かった。今後は方法面にも着目し、研究を深めたい。

文 献

- 1) 文部科学省(2017) 中学校学習指導要領 解説 保健体育編
- 2) 奈須正裕(2017) 『資質・能力と学びのメカニズム』, 東洋館出版, p.82
- 3) 岩田 靖(2019) 『深く学びがいのある体育の学習内容を探究する』, 体育科教育 67 (4), 大修館書店, pp.16-20